

## 【お話おばさんの西播磨昔話】 ひばち（火鉢）

どこの家でも火鉢が居間にどっかりとあった。火鉢の材質は陶磁器、金属、木材だった。周りの面は、色無地だったり、風景や花が描いてあった。

わいの家には、青い色をした半径 50 センチもある大きな六角丸の陶の火鉢があった。その横でいつもおばあちゃんがちょこんと背を丸めて座っとる。火鉢の中に炭を熾おこして入れると、火箸で火の調節をし、五徳を置いて、鉄瓶をのせた。鉄瓶はチンチンと音を立てた。早速急須にお湯を入れた。湯呑を持ち、口をしわくちゃにしてフーフと吹きながらお茶を飲んどった。

学校から帰ると、おばあちゃんはわいを見つけ手招きをした。おばあちゃんは鉄瓶をのけると、網を置いた。

「あっ、餅や」砂糖醤油で食べる焼餅は最高やったで。

遊びから帰ってくるとおばあちゃんはいなかった。わいが火鉢ひとり占めや。最初は手を温めたんやけど足も体も寒い。火鉢に両足を乗せて跨ぎ火鉢の上に座った。炭火の真上はほんまに尻が温こうて、もうやめられへん。体がポカポカしてきてええ気持ちや。おばあちゃんに見つかった。「何しとる。火傷するぞ。火事いくぞ」と一尺差して叩かれた。



ひばち

注 昭和の頃、火鉢は普通にみる事が出来た。遠赤外線効果でほっこりと暖かった。戦後、灯油や電気のストーブが普及し、一酸化炭素中毒や火災の危険から徐々に消えていった。現在は、植木鉢、睡蓮鉢、金魚鉢に使用されたりしているが、昔をしのんで火鉢を使う人もいるそうだ。

【文責：浜田多代子】

### 相生地区南町奉納相撲大会

## 南町荒神社夏まつり

## ちびっ子相撲大会

主催 南町自治会

8月12日(日)午前9時15分より、南町荒神社境内で恒例の「ちびっ子相撲大会」が執り行われた。連日猛暑続きの中、約40名の参加者(3歳~12歳)があり、家族や観客で熱気に溢れていた。

この相撲大会は五穀豊穡を願って、約100年以上も前から続き(一説では江戸時代から)、



立派な櫓のある土俵

力士が出るほど相撲が盛んな所であった。

現在は青年団組織がなくなり、自治会と青年団OB(友だち組織)の協力で引き継がれている。

昔は土俵の四隅に柱を立て、幕を張り手作りで相撲大会をしていたが、1940年に櫓を建立、4年前に今の櫓に新築した。健やかに育ってくれるようにと、子ども転がしの行事も昔からありOBの方も親にしてもらったと苦笑い!お陰で元気に過ごさせてもらっていると懐かしく話されていた。

また土俵での礼儀を知ってほしいと一人一人に細やかに指導されていた姿が印象的であっ



元力士と子どもたち

た。

この行事を通して、「相撲まわしの締め方、神事、山崩し、子ども転がし、ちびっ子相撲」等を地域文化として引き継いでいきたいと目を輝かせておられた。このひとつひとつが、歴史の生まれる瞬間だと感じた。

【取材・文責：西村光代】